

バルカン症候群

バルカン症候群 ばるかんしょうこうぐん

近年、バルカン半島、特にボスニア・ヘルツェゴビナやコソボを中心とした民族紛争の地域に展開したNATO（北大西洋条約機構）軍の兵士達に帰還後、がん、白血病、免疫不全、慢性疲労など様々な体調不良を訴えるものが続出した。戦後の現地住民にも同様な状況が認められた。これは「バルカン症候群」と呼ばれ、戦闘に使った劣化ウラン弾が原因ではないかと疑われている。使用された劣化ウラン弾は、ボスニア・ヘルツェゴビナで3トン（1万発）、コソボ紛争で10トン（3万1千発）と推定されているが、正確な総量は不明である。ウランは毒性の強い放射性物質であり、劣化ウランのもつ放射線毒性や化学毒性から、その危険性を強く訴える人々がいる一方で、世界保健機構（WHO）や米国国防省などは、「帰還兵や紛争周辺の住民の変調が劣化ウランによるものである、という科学的な証明がない」と否定的立場をとっている。

<登録年月>

2005年01月
